



414
A2782



獨逸法律書
第六冊

獨逸國民權法

千八百七十年六月一日獨逸^(註)國民及

邦ノ人民タルノ權ヲ得ル^ト及ヒ之ヲ失^コ

トニ關スル法律

天帝ノ輔翼ヲ以テ普魯西國ノ王タル^カ

イルレムハ兩院ノ允許ヲ得タル後

獨逸國ノ名ヲ以テ左ノ條々ヲ確定ス

第一條 獨逸國民タルノ權ハ連邦中一國



ノ國民^權得ル^ハ獨逸國民タルノ
權ヲ得^ハシ若シ一國ノ國民權ヲ失^フ
^ハ獨逸國民タルノ權ヲ失^フハ^シ(獨
逸憲法第三條ヲ見合ス^ハシ)

第二條 連邦中一國ニテ國民權ヲ得ル^ハ
將來ハ左ノ條件ニ從^フヘシ(國民權ハ
一國ノ國民權ヲ云^フ以下做^ス)

第一 血統(第三條ヲ見ル^ハシ)

第二 私生ノ子ヲ認^ムル^ハ(第四條ヲ見^ル
シ)

第三 婚姻(第五條ヲ見ル^ハシ)

第四 獨逸人ナル^ハ歸順ニ因^リ(連邦中ノ
一方ヨリ一方ニ歸順ス^ル)

第五 外國人ナル^ハ歸化ニ因^リ(第四第五
ハ第六條以下ヲ見ル^ハシ)

養子ノミ^ニテ國民タルノ權ヲ得^ス

第三條 獨逸人ノ婚姻ニ因^テ生^{タル}子ハ縱
令外國ニ在^テ生^{タリ}ト雖モ其父ノ國民權ヲ
得^ヘシ獨逸人ノ女ノ私生ノ子ハ其母ノ國民
權ヲ得^ヘシ

第四條 私生ノ子ノ父カ獨逸人ニシ^テ其母カ
父ト同一ノ國民權ヲ有^セサル^ハ其私生ノ
子ハ法律ニ從^テ實子ト認^マラル^ハ其父ノ

國民權ヲ得ヘシ

第五條 獨逸人ト婚姻シタル女ハ其次ノ國民
權ヲ得ヘシ

第六條 歸順及ニ歸化ハ行政官ヨリ交付スル
證書ニ因テ定ムヘシ

第七條 歸順證書ハ他ノ連邦中ノ國民ヨリ願

出タル片ハ歸順ヲ為ス可キ連邦ニテ之ヲ交
付スヘシ之ヲ交付スルニハ歸順スヘキ國內
ニ已ニ移住シタルヲ證明シ且千八百六十
七年十一月一日ノ自由轉住法ノ第二條ヨリ
第五條マテニ從ヒ轉住スル者ヲ逐拂ヒ又ハ
歸順ヲ拒ハムヘキ理由ナキ片ハ其證書ヲ交
付スヘシ

千八百七十六年七月廿六日ノ地方行政権限法

第百六十一條ニ因リ千八百七十一年六月一日ノ
獨逸國民タルノ權ヲ定ムル法律ニ因テ行政官

ニ付與シタル職掌ハ以後ハ縣令ニテ之ヲ行フヘシ
若シ縣令ニテ他ノ連邦中ノ國民ニ歸順證書ヲ
交付スルトヲ拒ミタル片ハ二十一日内ニ行政
裁判所ニ訴出ルヲ得其訴ハ上等行政裁判
所ニテ判決スヘシ

第八條 歸化ノ證書ハ左ノ條件ヲ具備スル片

ハ外國人民ニ之ヲ交付スルトヲ得
第一 外國人民ノ其本國ノ法律ニ於テ財產ヲ管
理スル權ヲ有スル片但財產ヲ管理スルノ權
ナキ片ハ其父又ハ其後見人又ハ管財人ノ
許可ヲ要スヘシ(未下年者精神病等者ヲ云フ)

第二 是迄品行正シクアリシ中

第三 歸化スヘキ土地ニ私有ノ家屋ヲ所持スルカ又ハ借宅シテ住居スルキ

第四 歸化スヘキ土地ニ於テ其地方ノ景況ニ從ヒヒレト其家屬ヲ養育スルコトヲ得ヘキ

歸化ノ證書ヲ交付スル前ニハ行政官ヨリ歸化スル地方又ハ歸化スル地方ノ貧窮組合ニ第二第三反

ヒ第四ノ要件ニ付キ其意見ヲ問フヘシ
第九條 一連邦ノ政府又ハ行政官ヨリ外國人

又ハ連邦中ノ國民ヲ間接又ハ直接ノ官員ニ任シ又ハ寺院學校郡村等ノ官吏トナリタル

キハ歸化又ハ歸順證書ヲ交付スルコトヲ要セス然レモ其官ニ任スルキ別段ノ契約ニル者ハ格別ナリトス

外國人ヲ獨逸國ノ官吏ニ任シタルキハ其任

セラレタル者ノ職務上ノ住居ヲ定メタル國ノ國民權ヲ得ヘシ
千八百七十五年十二月二十日ノ獨逸國ノ

官吏ト為リタル外國人ノ歸化法ニ獨逸國ノ官吏ニ任セラレ獨逸國ノ出納局ヨリ俸

給ヲ受ケルニ其職務上ノ住居ハ外國ニ在ルキ國民權ヲ得シトテ獨逸タルキハ各連

邦ハ歸化證書ヲ交付スルコトヲ拒ムコトヲ得

第十條 歸化證書又ハ歸順證書ハ之ヲ交付シタルキヨリ國民權ニ附著スル權利義務ヲ生

スハシ

第十一條 國民權ニ附與シタルキハ其權ハ專

及ヒ其子ノ未丁年者ニモ及フヘシ(丁年ノ子ハ本國ニ屬ス故ニ別段ノ手數ヲ為サ、レハ其權ヲ得ス)但シ其証書ニ特別ノ取除ヲ掲ケサルキニ限ル

第十二條 連邦中ノ國內ニ住居ヲ定ムルト雖

モ是ノ以テ國民權ヲ生セス

第十三條 國民權ハ今ヨリ左ノ場合ニ限リ失フモノトス

第一 願出ニ因リ國民權ヲ解ク片(第十四條以下參看)

第二 行政官ノ公告ニ因リ國民權ヲ解ク片(第十九條參看)

(第十九條參看)

第三 十年間外國ニ寄留スル片(第二十條參看)

第四 私生ノ子ハ他國ノ法律ニ從テ認ラレ

タル片但シ其父ノ他國人ニ屬スル片

第五 一連邦ニ屬スル女ニシテ他ノ連邦人

又ハ外國人ニ婚姻スル片

第十四條 國民權ヲ解ク片ハ本國ノ行政官ヨ

リ國民權解放證書ヲ交付スルヲ以テ其効ヲ

有トス

第十五條 何人ニモ連邦中一國ニ於テ國民

權ヲ得タルヲ證明スル片ハ解放證書ヲ

交付スルニ當リ之ヲ證明スルヲ能ハサル片

ハ在ニ場ヲル者ニ其證書ヲ交付ス可カラズ

第一 滿十七歳ヨリ滿二十五歳ニテノ徵兵
 適於ノ者ハ即徵兵委員ヨリシテ陸軍又ハ
 海軍ニ編入セラル。下ヲ規避スルノ目的
 ニ非ニシテ下ヲ證シタル證書ヲ差出スニ非
 シ。ハハ非支證書ヲ交付ス可カラヌ
 第二 陸軍又ハ海軍ニ編入シタル軍人及ヒ
 海軍ニシテ士官及ヒ一級ノ官吏是等ノ者ニ
 ハ其職務ヲ免スル前ニハ解放證書ヲ交付
 ス可カラヌ
 第三 準備兵 準備(七年ノ内三年ヲ勤メ殘
 四年以兵中ノ者)及ヒ後備兵並海軍及ヒ砲
 臺ノ準備兵及ヒ士官ニ非ナル海陸ノ士官
 是等ノ者ハ出兵ノ命ヲ受ケタル後ハ解放

證書ヲ交付ス可カラヌ
 第十六條 前條ニ掲ケタル事由ヨリハ他ノ事
 由ヲ以テ平時ニハ解放證書ヲ交付スルコトヲ
 拒ムコトヲ得ス戰時又ハ戰爭ノ開カントスル
 時ハ上院ノ本局ヨリシテ之カ爲メ特別ノ布
 告ヲ發スルコトヲ得(解放證書ヲ給セサルコト)
 地方行政權限法第六十一條ニ從ヘハ平
 時ニ於テ普魯西國民ニ解放證書ヲ交付ス
 ルコトヲ拒ミタルハ二十一日内ニ行政裁
 判所ニ訴フルコトヲ得其訴ハ上等行政裁
 判所ニ於テ判決スヘシ
 第十七條 國民権解放證書ハ其證書ヲ交付シ

タルキヨリ其國權ヲ失フ者トス

然レ日本ハ證書ヲ受取タル日ヨリ六ヶ月
内ニ獨逸國外ニ轉任セサルカ又ハ他ノ連科

第十八條 國民權ヲ得サルハ其證書ノ效ナシ
其未丁年ノ子ニモ及フヘシ但其證書ニ特別

第十九條 外國ニ寄留セル獨逸人ハ戰時又ハ戰爭
ヲ開カントハ時上院ノ本局ヨリ布告ヲ發シ一

定ノ期限中ニ歸國ス可キトテ告諭スル之
ニ從ハサルハ本國政府ヨリ其者ニ對シ國

第二十條 獨逸人ノ獨逸國ヲ去テ十年間絶ハ
ズ外國ニ寄留スルハ之カ為メ國民權ヲ失

フヘシ其期限ハ獨逸國ヨリ出立シタル日ヨ
リ起算ス若シ本人カ旅券又ハ本國證書ヲ所

持シタルハ其期限ノ經過シタルキヨリ起
算スヘシ(旅券及ヒ本國證書ハ一年間ヲ經過

スレバ其效ナシ)又其期限ハ獨逸領事館ノ簿
冊ニ記入スルハ其期限ノ經過ヲ中止スヘ

シ其簿冊ノ記入ヲ削除シタルハ其翌日ヨ
リ更ニ期限ノ始ル者トス十年間外國ニ寄留

セル為メ國民權ヲ失ヒタルハ其妻及ヒ未
丁年ノ子ニモ亦及フヘシ但其妻カ夫ト共
ニ居住スルカ又ハ其子ノ父ト共ニ居住スル
ハニ限ルヘシ
獨逸人カ外國ニ少クモ五年間寄留シ外國ニ

於テ國民權ヲ得ルハ其外國ト條約ヲ結ヒ
十年間ノ期限ヲ五年ニ短縮スルヲ得但本
人カ旅券又ハ本國證書ヲ所持スルト所持セ
ハルニ拘ラサルヘシ
其獨逸人カ十年間外國ニ寄留セシカ為メ國
民權ヲ失ヘトモ未タ他國ノ國民權ヲ得サル
片ハ必シモ本國ニ歸ラサレ比更ニ本國ノ國
民權ヲ受クルヲ得ヘシ
獨逸人ノ十年間外國ニ寄留セシカ為メニ國
民權ヲ失ヒ然ル後獨逸國ニ歸來ル片ハ轉任
シタル連邦中ノ行政官ニ願出テ歸順證書ヲ
受タルヲ得
地方行政權限法第百六十一條ニ縣令ヨリ最

初獨逸人タリシ者ニ歸順證書ヲ交付スル
ヲ拒ミタル片ハ二十一日内ニ行政裁判所ニ訴
フルト得其訴ハ上等行政裁判所ニテ之ヲ
判決スヘシ

第二十一條 獨逸人ニシテ本國政府ノ許可ナ
クシテ他國政府ノ官吏ト爲リタル片ハ本國
政府ヨリ一定ノ期限ヲ定メ辭職スヘキヲ
本人ニ命ジ仍ホ本人ノ辭職セサル片ハ本國
政府ハ本人ニ對シ國民權ヲ失ヒタルノ公告
ヲ爲スヲ得
第二十二條 獨逸人ノ本國政府ノ許可ヲ得テ
他國政府ノ官吏ト爲リタル片ハ其國民權ハ
之カ為メ失フヲ得

第二十三條 歸順證書及ヒ第十五條第一項ノ
國民権解放證書ハ其費用ヲ取ラスシテ之ヲ
交付ス可シ

第十五條第一項ノ外ノ場合ニ於テ國民権解
放證書ヲ交付スルニハ印紙料及ヒ手数料合
シテ三ツマルクヨリ多ク取立ウヘカラス

第二十四條 此法律ヲ頒布スルノ日ニ於テ外
國ニ寄留セル獨逸人ハ其本國ノ法律ニ従ハ

ハ十年以上外國ニ寄留スルハ其國民権ヲ失
フハレトアルカハ其期限ノ經過ハ此法律ニ

因テ中止セラル、フナシ

其他ノ連邦國ノ國民ニ對シテハ第二十條ニ
掲ケタル期限ハ此法律ノ効力ヲ得ル日ヨリ

起算スヘシ

第二十五條 都テ此法律ニ牴觸スル規則ハ廢
止スル者トス

第二十六條 此法律ハ千八百七十一年一月一
日ヨリ効力ヲ有スヘシ

